



図129 天神山城跡

天神山城は、長岡市小国地域（旧小国町）から本拠地を移した小規模な土塁跡があり、その外側には石垣に使われた大ぶりの石が崩れながらも残っている。

天神山の中腹には当時の重要な水源地であったと考えられる瓢箪形をした池があり、現在も満々と清水を留めている。また、水源地の東側には、長さ八五メートルにも及ぶ大規模なものがある。天神山の範囲は、東西約五〇〇メートル、南北約二〇〇メートルにも及ぶ大規模なものである。天神山の中心部である実城は、山頂部の幅七メートル、長さ四五メートルほどの平坦地に築かれていたと考えられる。また、実城を中心として主要な平坦地に階段状に造成し、要所には土塁や堀・石垣を作って、守りを堅固にしている。山城の全体の範囲は、東西約五〇〇メートル、南北約二〇〇メートルにも及ぶ大規模なものである。天神山の中心部である実城は、山頂部の幅七メートル、長さ四五メートルほどの平坦地に築かれていたと考えられる。また、実城を中心として主要な平坦地に階段状に造成し、要所には土塁や堀・石垣を作って、守りを堅固にしている。山城の全体の範囲は、東西約五〇〇メートル、南北約二〇〇メートルにも及ぶ大規模なものである。天神山の中心部である実城は、山頂部の幅七メートル、長さ四五メートルほどの平坦地に築かれていたと考えられる。また、実城を中心として主要な平坦地に階段状に造成し、要所には土塁や堀・石垣を作って、守りを堅固にしている。山城の全体の範囲は、東西約五〇〇メートル、南北約二〇〇メートルにも及ぶ大規模なものである。



図128 城跡の位置
5万分1地形図「弥彦」

天神山城跡は、西蒲区石瀬・岩室温泉・間瀬
天神山城跡は、石瀬集落の西方にある標高二三四メートルの天神山山頂周辺に築かれた山城跡である。天神山の東麓には北陸道と矢川が通っており、水陸交通の要所を押さえる場所に位置している。

現地踏査によれば、城の中心部である実城は、山頂部の幅一

天神山城跡 西蒲区石瀬・岩室温泉・間瀬

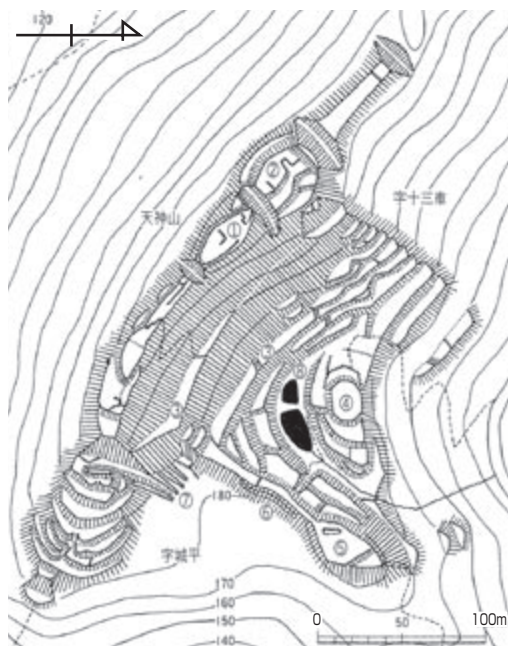


図130 山城遺構 『吉田町史』資料編1から主要部を転載

国氏の代々の山城である。小国氏は戦乱の続く中世において、弥彦荘の一面に強大な勢力を有した。正応三（しょうおう一二九〇）年の記録に、弥彦神社の神官として「小国彦八」の名が見られることから、このころには既に当地に進出していた可能性がある。天神山城がいつ築かれたのかは不明であるが、十四世紀の南北朝の騒乱の時に築かれた可能性が高いと考えられている。激しい動乱の時代を経て、天神山城は次第に強固に改良されていったと考えられるが、慶長三（一

五九八）年、上杉氏が会津へ移封（領地換え）されると、城主の大国実頼（小国から大国に改姓）も付き従って行ったため、天神山城は廃城となった。

なお、城主が普段暮らしていた居館は、天神山東麓の陣屋敷と呼ばれる所にあつたと考えられている。城跡は昭和四十三（一九六八）年に岩室村の史跡に指定され、新潟市の史跡に継承されている。